

昭和三年十一月二十二日納本

(昭和三年十一月二十四日發行)

第一卷 第三號

力の供子



號 三 第

教 育 斷 想

和賀郡立石校 小 原 孤 筆

目 次

月夜の電信柱 (一)
宮澤賢治

子供の科學
ハマナスの話
杉村松之助

辯論講話
御話について
黒澤尻町 モトヂ生

童ジヨンゲール少年
家庭一週一題
或る母の苦心談
土澤町 一女性

教師欄
クレエヨン習字
小田島柏龍

現代思潮
に對する教育方針
花巻川口町花城小學校
童謡に就いて

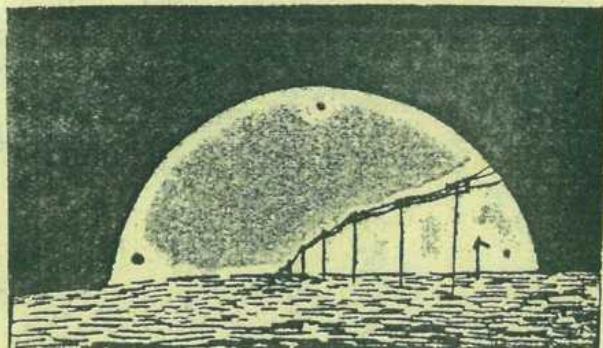
- ◆ 児童は空な器で教師はそれに何かを一杯みたす職人かしら…?
- ◆ 與へられる俸給に恥ぢない爲に汝の大きい手は朝靄のやうに柔い兒童の魂にエライ彫刻をやつてゐる…。
- ◆ 一定量の重荷を全兒童に與へて監視する汝の眼の冷たき汝はポルガの船唄の哀調をさへ感じないであらう。
- ◆ 神の分身が兒童だ、それに惡の部分を加へたものが何か…? 汝は身も魂も大人なる事を恥ぢねばならない…。
- ◆ 美衣と胸章をすてゝ何故洗足のまゝボブラーの下の子供等と一緒に歌はないのだなぜ丘の上の銀杏の葉と一緒に拾はうとしないのだ。

- ◆ 教育者よ汝の名は?
- ◆ 純眞な童心の世界の忠實な奴隸であらねばならない。

兒童文苑
編輯室から
子守たち

高橋芳夫

現代思潮
に對する教育方針
花巻川口町花城小學校
童謡に就いて



——童一話——
月夜の電信柱

(—)

宮澤賢治

ところがその晩は、線路見まはりの工夫もこず
△：月の光り：△

あります。晚、恭一は。さう
りをはいて、すたすた鐵道線路の横の平らなところをあるいて居りました
たしかにこれは罰金です。あまけにもし汽車がきて、窓から棒の出た汽車にも
がはらわたの底までもしかはり、どうもじつに變えてこな物を見たのです
九日の月がそらにかゝつてゐました。そしてそ
が出てゐたら、一べんに
なぐり殺されてしまつた
な。そらくもはみん

てあります。つまりシグナルがさがつたといふだけのことです。一晩に十四回もあることなのです。

ところがそのつぎが大へんです。
恭一はすたすたあるいて、もう向ふに停車場の
はて、ぐわあん、ぐわあんとうなつてゐたでんしんばしらの列が大威張り

とこまできました。ほんと一ぺんに北の方へ歩き
としたまつ赤なあかりや
硫黄のほのほのやうに
ぼうとした紫いろのあか
りやらず、眼をほそくし
てみると、まるで大きな
お城があるやうにあもは
れるのでした。

で、一ぺんに北の方へ歩き
出しました。みんな六つ
の瀬戸もの、エボレット
を飾り、てつぺんにはり
がねの槍をつけた亞鉛の
しゃつぶをかぶつて、片
脚でひよいひよいやつて
行くのです。そしていか
にも恭一をばかにしたや
うに、

とつぜん、右手のシグ
ナルばしらが、がたんと
からだをゆすぶつて、上
の白い横木を斜めに

▽：下の方へ：△

▽：じろじろ：△

横めて見て通りすぎます。

なりもだんだん高く
いまはいかにも
の立派な軍歌に
まひました。
ドツテテドツテテ
ドツテテド、
でんしんばしらの
ぐんたいは
はやさせかいにな
ぐひなし
ドツテテドツテテ
ドツテテド

でんしんばしらの
でんたいは
きりつせかいにな
らびなし。」
一本のでんしんばしら
が、ことに肩をそびやか
して、まるでうで木もが
りがり鳴るくらいにして
通りました。

みると向ふの方を、六
本うで木の二十二の瀬戸
もののエボレットをつけ
たでんしんばしらの列が
やはりいっしょに軍歌
を

▽：うたつて：△
進んで行きます。

「ドツテテドツテ
ドツテテド
二本うで木の工兵
隊

六本うで木の龍騎
兵
人

いれつ一萬五千

はりがねかたくむ
すびたり。」
どうゆふわけか、二本
の柱がうで木を組んで、
びっこを引いていつしょ
にやつてきました。そし
て

▽：いかにも：△
つかれたやうにふらふら
頭をふつて、それから口
をまげてふうと息を吐き
よろよろ倒れさうになりました。

するとすぐうしろから
來た元氣のいいはしらが
どなりました。

「あい、はやくあるけ
はりがねはたるむぢや
ないか。」
ふたりはいかにも辛さ
うに、いっしょにこたへ
ました。

「もうつかれてあるけ
ない。あしさきが腐り
出したんだ。長靴のタ
ルもなにももうあち

うしろのはしらはもど
かしさうに叫びました。
「はやくあるけ、ある
け。
きさららのうち、どつ
ちかが參つても一萬五千
人みんな責任があるんだ
ぞ。あるけつたら。」
二人はしかたなくよろ
よろあるきだし、つぎか
らつぎと

▽：はしらが：△
どんどんやつて來ます。
「ドツチテドツテ
ドツテテド
やりをかざされると
たん帽

すねははしらのご
すねははしらのご
ふに、三本うで木のまつ
は、六本うで木のまつ
赤なエボレットをつけた
兵隊があるいてゐること
です。その軍歌はどうも
ふしも歌もこつちの方
とはちがふやうでしたが
こつちの聲があまり高
いために、何をうたつて
ゐるのか聞きとることが
出来ませんでした。こつ
ちはあいかはらずどんど
んやつて行きます。

「ドツテテドツテ
ドツテテド
塞さはだえをつん
ざぐも
などて腕木をあろ
すべき
ドツテテドツテ
ドツテテド
暑さ硫黃をとかす
とも
いかであとさんエ
ボレット。」
どんどんどんどんどん
ところか愕ろいたこと
やつて行き、恭一は見て
ゐるのさへ少しだ
▽：つかれて：△
ぼんやりなりました。
でんしんばしらは、ま
るで川の水のやうに、次
から次とやつて來ます。
みんな恭一のことを見て
行くのですけれども、恭
一はもう頭が痛くなつて

だまつて下を見てゐまし
た。

俄かに遠くから軍歌の
声にまじつて、

「お一二、お一二、」とい
ふしわがれた聲だきこえ
てきました。恭一はびつ

くりしてまた顔をあげて
見ますと、列のよこをせ
いの低い顔の黄いろなぢ
いさんがまるでぼろぼろ
のねづみいろの外套を着
て、でんしんばしらの列
を見まはしながら

「お一二、お一二、」と號
令をかけてやつて來るの
でした。

ちいさんに

▽:みられた:△
柱は、まるで木のやうに
堅くなつて、足をしやち
てんしんばしらの方へ向

ほこばらせて、わきめも
ふらず進んで行き、その
變なさいさんは、もう恭
一のすぐ前までさつてき
ました。そしてよこめで
しばらく恭一を見てから
堅くなつて、足をしやち
てんしんばしらの方へ向

いて、
「なみ足い、あいつ。」と
號令をかけました。

そこででんしんばしら
は少し歩調を崩してやつ
ぱり軍歌を歌つて行きま
した。 (つづく)



子供の科學

杉村 松之助

ハマナスの話

所に咲いてゐたのか知ら

ずつと早くのことです
私は宮城県の米川小學校
にいつたことがありまし
た。小使さんに名刺をた
のんで出さうとおもつて
裏の方へまはりました。

そしたらお庭にハマナス
が丈高くのびてるので
私はちょっと驚きました
あやあや此の花がこんな

でならなかつたのでした
聞いてみると、石の巻へ
旅行をしたとき探つてき
たのだとかいつてゐまし
た。尤も花といつても私
の往つたのは十一月の半
ばごろでしたから、花が
咲いてゐなかつたのです
その代り大きな赤い實が
どつさりついてゐて、花
ざかりのそれがしのばれ
てならなかつたのです。
其の後わたくしの石巻に

途の右にも左にもハマ
ナスの花が、きれいなく
れなゐの色を見せて咲
た。愉快ほこつてゐました。
ああハマナスといふと
大抵青い時に鹽漬にする
二錢銅貨大のくびり目の
在來種をいつたものです
あるひらつたいトマトの
花邊でハマナスといつ
てゐるのが、茄科(ナス
クワ)の植物で、漢字で
は蕃茄と書くのですが、
私のこゝでいつてゐるの
は、薔薇科(バラクワ)の
植物で漢字では、玫瑰と

書くのです。
幹も葉もバラの花に、
よく似てゐます。バラの
花といつても春にも夏に
も秋にも、鉢や花壇で咲
くバラではなく、やはり
六七月ごろですが、野や
山や途端などに、よくヤ
ブをつくつてブンといふ
香りを出して、白いたく
さんの花を見せてゐるの
をいつたのです。此のバラ
は學問上ではノイバラ
といふのですが、ハマナ
スはこのノノイバラに似
てこれよりも、もつと花
も實も大きいのです。こ

れは名が示してゐるとほ
り濱の花です。海濱の植物
です。それが山奥に結
構よく咲いたあとがあつ
たので、私は驚いたので
した。

しかし、よくあるいて
みると大も棒にあたるで
今年の十月のさう手帳を
見たら十六日でした。和
賀郡の田瀬で、ハマナス
の自生を見付けました。
それは小倉築の附近でし
たが、試みに其の邊の人
たちに名前を聞いたら「
ナニこれはただのバラで
ごわす」といつて別にか
へりみもしなかつたので
す。「イヤこれはただの
バラではないですよハマ
ナスといふもので、本當
いへばこれは濱の花で、
バラの格好がしてゐるん
だが、バラよりも花も實
もすつと大きい筈です」

といつてやつたら、「なる
ほどさういはれてみれば
大きごわす」といつて、
互に其の植物を見なほし
たのです。

◆

◆

◆

◆

◆

◆

◆

◆

◆

◆

◆

◆

◆

◆

◆

◆

◆

◆

◆

◆

◆

◆

◆

◆

◆

◆

◆

◆

◆

◆

◆

◆

◆

◆

◆

◆

◆

◆

◆

◆

◆

◆

◆

◆

◆

◆

◆

◆

◆

◆

◆

◆

◆

◆

◆

◆

◆

◆

◆

◆

◆

◆

◆

◆

◆

◆

◆

◆

◆

◆

◆

◆

◆

◆

◆

◆

◆

◆

◆

◆

◆

◆

◆

◆

◆

◆

◆

◆

◆

◆

◆

◆

◆

◆

◆

◆

◆

◆

◆

◆

◆

◆

◆

◆

◆

◆

◆

◆

◆

◆

◆

◆

◆

◆

◆

◆

◆

◆

◆

◆

◆

◆

◆

◆

◆

◆

◆

◆

◆

◆

◆

◆

◆

◆

◆

◆

◆

◆

◆

◆

◆

◆

◆

◆

◆

◆

◆

◆

◆

◆

◆

◆

◆

◆

◆

◆

◆

◆

◆

◆

◆

◆

◆

◆

◆

◆

◆

◆

◆

◆

◆

◆

◆

◆

◆

◆

◆

◆

◆

◆

◆

◆

◆

◆

◆

◆

◆

◆

◆

◆

◆

◆

◆

◆

◆

◆

◆

◆

◆

◆

◆

◆

◆

◆

◆

◆

◆

◆

◆

◆

◆

◆

◆

◆

◆

◆

◆

◆

◆

◆

◆

◆

◆

◆

◆

◆

◆

◆

◆

◆

◆

◆

◆

◆

◆

◆

◆

◆

◆

◆

◆

◆

◆

◆

◆

◆

◆

◆

◆

◆

◆

◆

◆

◆

◆

◆

◆

◆

◆

◆

◆

◆

◆

◆

◆

◆

◆

◆

◆

◆

◆

◆

◆

◆

◆

◆

◆

◆

◆

◆

◆

◆

◆

◆

◆

◆

◆

◆

◆

◆

◆

◆

◆

よく覺えてゐませんが
乃木大將の息子の勝典、
保典の兄弟が小さい時冬
になつてもお父う様から
火鉢を與へられないので
乃木式火鉢と云つて相撲
をとつたと云ふ話でもつ
たと思つてゐます。

その頃の私の先生もよ
くその雄辯會で話してゐ
ました。何時か私にも出
ないかと云はれたので、
この次と約束しそれから
一ヶ月一生懸命乃木大將
のドタンバタンを練習し
てその次に出る積りで行
つたら先月私に出るやう
にと約束した幹事の人が
出るとも何んとも云はな
い。

（二）
昔々或る所にコムスと云ふ少^ひな、そして平和な國^{くに}はありました。その國^{くに}の王様^{わうさま}は極めて賢いそしてやさしい王様^{わうさま}であります。ですから國^{くに}は大^{おほ}く喜んで働きました。ですが國^{くに}は大^{おほ}く金持^{かねもち}でした。この位^{くわい}平和な^{ひやう}として金持^{かねもち}な國^{くに}でも、只^{ただ}一つ困つた事^{こと}はあります。それは王様^{わうさま}には蚊^かのやうに小さかつたりで失敗^{しふ}しました。それから私は、よく色々の人の話をききましたが一番最初にきいた天野先生の話位^{ほな}上手だと思ふ

話をさいたことがありますせん。
これからさきて面白かつた話、話して失敗したこと、ボチ／＼この欄にかいてみたいと思ひます。

五六日ばかり経つての事でした。二三人の重立た家來等を集めて、相談の會は開かれました。それは、廣く國中から王様の相續人をお選びになることでした。そのことは決まると皆んな家來達は歸つてしまひました。

それから一ヶ月ばかりの後には、國中何處の町にもたてふだは立てられました。此の立札を見た町の連中は大騒ぎでした。○「なんだこいつア：エート」△「バカッ！ もつたいない奴だ、これは我等の國の王様の有難いお言葉だぞ。」と云ふ調子で皆んな、一々禮をしてそれから読み始めるのでした

童話

ジョングール少年

小田島 柏 龍

くなつて立つてゐて又思
ひ出して續けました。

昔々或る所にコムスと云ふ少小さな、そして平和な國はありました。その國の王様は極めて賢いそしてやさしい王様でありましたので、國の人民は大そう喜んで働きました。ですから國は大そう金持でした。この位平和なそして金持な國でも、只一つ困つた事はありました。それは王様にはお子さんはありませんでした。

た。そこで王様の相続人をする者はないので、王様は絶へずそのことばかり考へて居りました。色々偉い家来さん達と御談になりましたが、王様の御氣にかなつたお子さんはありませんでした。そこで王様はお考へになりました。

したが、此の立札を見た時に、連中は大騒ぎでした。○「なんだこいつアエトト」△ハカツ！もつたいい奴だ、これは我等の國の王様の有難いお言葉だぞ」と云ふ調子で皆んな、一々禮をしてそれから読み始めるのでした

よく覺えてゐませんが その頃の私の先生もよ
乃木大將の息子の勝典、 くその雄辯會で話してゐ
保典の兄弟が小さい時冬 ました。何時か私にも出
になつてもお父う様から ないかと云はれたので、
火鉢を與へられないので この次と約束しそれから
乃木式火鉢と云つて相撲 一ヶ月一生懸命乃木大將
をとつたと云ふ話でもつ たと思つてゐます。
「ドタンバタン兄弟は座 てその次に出る積りで行
敷の真中で相撲をとりま つたら先月私に出来るやう
した。」と中頃まで話した。 にと約束した幹事の人が
らすつかり忘れて随分赤 出るとも何んとも云はな
い。

五六日ばかり経つての事でした。二三人の重立た家来等を集めて、相談の會は開かれました。それは、廣く國中から王様の相續人をお選びになることでした。そのことは決まるとなれば、家来達は歸つてしまひました。

池に、王様の大切な寶物を落したによつて、池の中にくつて行つて、寶物を尋ね廻る七八歳の子供を五人ばかり入用なのだ。望みの者は直ぐ王城近い建物に集ること。但し十日以内のこと。各大名

に集ること。但し十日以内のこと。各大名として、父さんは、パン屋の職工として働いて居りました。パン屋の主人は大そう親切で又おとなしい人でしたので、祖父さんを大き大事にして居りました。しばらくして祖父さんは歸つて来ました。その時に集まつた。祖父母は、立札を見たのです。主

「オウこれは善い事だヨシ。」と心の内で喜んで立札を拜んで歸つて来ました。祖父母は、立札を見た。家へかへつて見ると、職工等は歸つて来ました。祖父母は平常より度をして待つて居りました。祖父母は平日よりにはもう子供は夕飯の仕事が或る町はづれに貧乏な、そして父母を失な、そして祖父に育てられてゐる七歳の子供はありました。この子供は、町でも孝行な子供として賞られて居たのでした。子供は、感心なことは、バーンを幾つか買つて来て、それを賣つてはそのくら

しをたすけて居りました。した。そしてたのしく夕飯を食べました。今日の働きぶりなんかを話合つて喜んで居りましたが、祖父さんふと、祖「オーワーダー」と思付いたやうに、今の出来事を頗立札は立つて、その立札

は歸つて居りません。祖笑ながら話出しだりました。

（五）

（六）

（七）

に、此の頃ソノ王城の近い深い池に、寶物を落しました。祖の頭の中に、三年ばかり前の事を出張先から歸り路、例の立札を見たのです。主

は、此の頃ソノ王城の近い深い池に、寶物を落しました。祖の頭の中に、三年ばかり前の事を出張先から歸り路、例の立札を見たのです。主

は、外でもないのですが、町の中央に新しい立派な立札は立つて、その立札の爲、王様の爲なら例へ大切なる孫なりとも犠牲にしませう。私はやります」と、きつぱり言切りました。主「さうですか、それ

で私も安心しました。でも王様の有難、さこれと思つてゲール爺は、一王

様の爲ならば。」と思つたのです。長い／＼此の話をづつと聞いて居たジョン少年は、勇敢にも「ヨシフ、私は行つて必ず王様の寶物を探し出して参ります。」と、その顔には眞實の色はあふれて居りました。幾日か過ぎた。

爲ならば。」と思つた
す。長い／＼此の話
つと聞いて居たジヨ
年は、勇敢にも「ヨ
、私は行つて必ず王
寶物を探し出して參
す。」と、その顔には
の色はあふれて居り
た。幾日か過ぎた。

ヨンゲール少年は「私は
真心を持つて必ず／＼や
り通うし、王様の爲、國
の爲ならば一身を投げて
も探し出して御覽に入れ
ます。」と言放ました。王
様はこの一言は聞きたか
つたのでした。

(九)

ジョン少爷は、この一言をもつて王様の相続をすることにきまりました、ゲール爺もバン屋の主人も「池の中に入るは愚か、王様の相続人を選ぶのとは全くおどろきましたネ!」二人の顔には、喜び様子はみなぎつて居りました。七才から学問をし、武術を習つて、幾年かの後には平和な國王として、國民の信用を受け、王様の机に向ふことは出来ました。

家庭一週一題　或る母の苦心談　和賀郡土澤町　一女性

學校で始めて地理を教授される場合に、特に先生に御願致したいと思ふのは、地圖上での方角の觀念であります。此の觀念が餘程しつかり児童の頭に描かれてゐないと、先生が何々川は北から南に流れてをるとか、何々山脈が東北から西南に走つてをるとか、東南は平野で西北は山岳であるとか、先生はどんなに御熱心に、お手上に御話されても、子供等にはそれこそ馬耳東風といつた様なことになりはせぬかと思はれます。素より私は教師としての経験は全くありません。

唯家の子供等の口からうしたこと（方角が分ぬこと）を聞かされたあります。それで私は何とか家で其の方角の觀念をいくらでも補充しやりたいと思ふ所から供等の常居と申さうか自習室といつた様な室壁に方角を主として示地圖をかけることにしました。自分としては之が餘程役立つた様に感ました。

古心談　澤町　一女性

唯家の子供等の口からさうしたこと（方角が分らぬこと）を聞かされたのであります。それで私は何とか家で其の方角の觀念をいくらでも補充してやりたいと思ふ所から子供等の常居と申さうか、自習室といつた様な室の壁に方角を主として示す地圖をかけることにしました。自分としては之れが餘程役立つた様に感じました。

それから家の子供等は大抵お勘定が得手な方であります。が、唯一人の娘ばかりは非常に不得手で小学校の初學年の頃は随分困つたものです。第一困つたことは數の觀念が全く

出来てゐないことで數字を唱へたり物を數へたりするに單に機械的にするに過ぎなかつたのであります。例へばお金の様なまるいもので之れは五つであるとか六つであるとか教へてをつて今度は四角又は三角なもので同じ數を數へてさつぱりわからぬ。又青い物で數へてあつたのを今度は赤い物で教へれば矢張り同様であります。そこで同じ物を數へるにも横に並べたり縦に並べたり色々な位置に並べたり縦に並べたり斜に並べたり色々な位置に並べて勘定させたり、大小を取交ぜて計算したり、右から左の方へ數へたりその反対にしたり、上から下に數へたり、下から上にさしたり、色々な色を取交ぜて計算したり形の異なるものを色々取交ぜて數へたり色々な方法で苦心して兎に

角數の觀念を構成する様になりました。それからまでなる様になり現に盛岡高等女學校に在學中であります。が總ての學科の内で今では數學に一番興味を有つてをります。

とひた泣きに泣いてをつたがおしまひには泣疲れで眠つてしまふのでありました。三男になると室内で亂暴して室外にあはれ出ようとするのでありました。その性質（兄は理窟屋、次男は暢氣三男は荒っぽい）は今に尙明かになつてをります。ですから學業の方でも仕付の方でも其の干涉は隨分と子供のたちを見て適當にせねばならぬことを痛切に感じてをります。

し非常な効果を収めたので過日市へその成績を報告した同校では毛筆習字は三年生からでないと課せないことにしてゐるのを一二年級の児童がとかく粗雑に流れ勝ちになりこれが將來に及ぼす影響の大きいのに鑑み毛筆書方への梯級としてクレエ方への梯級としてクレエ

ヨンにする習字手本をつくり生徒に練習させてゐるがクレエヨン書方にする手の運動は毛筆書方の運筆方法によく似てゐるので鉛筆石筆などの硬筆書方に比べて最もよく毛筆書方の筆勢を表現することが出来非常に好都合だと言はれてゐる。

そしていふには若し此の工事に日本人を使つたなら二ヶ年半の日數は確に延びるとこの一例を以ても解ることである彼の安南ビルマヘルシャなどは何れも文明の中毒にあひ権利は果てしなく主張し義務はなるべく之れを避け既に滅亡に傾してをる國である。

教育も亦此の範圍を脱すことが出来ない。何れも自由を主張するが規律秩序を無視せる動物的自由を以て眞の自由と曲解してをる。

トルストイの無制裁學校に於ては授業中喧嘩をする者あり、出て行く者あり全く兒童の自由に任しておくが、それで立派に成功してをる。

教師欄

クレエヨン
習字

クレエヨン 習字 皋。阜。梅。林。校。の。試み。元來我が國民は権利はよ。い。現代思潮の影響としては良い所は勿論澤山あるが悪影響も決して少くはない。

花城小學校
所苦痛する所はなるべ
之れを避けようとする
へば勞働問題に於て
時間制は果して我が國
に實施され得るであら

も自由を主張するが規律を無視せる動物的自由を以て眞の自由と曲解してゐる。

現代思潮 に對する 教育方針

花巻川口町 花城小學校

現代思潮の影響としては、良い所は勿論澤山あるが、惡影響も決して少くはない。

元來我が國民は権利はよく之れを主張するが義務は可成これを免れんとする傾向がある。而して現代の思潮に於ても自分等の都合のよい所ばかりを探り其の爲さねばならぬ所苦痛する所はなるべく之れを避けようとする例へば労働問題に於ても八時間制は果して我が國民に實施され得るであらうか彼の郵船ビルディングを請負ふたフラー氏は日本人を一人も使はない而も賃銀の二倍餘も高い本國から職工を呼び寄せてやらした。

も自由を主張するが規律
秩序を無視せる動物的自
由を以て眞の自由と曲解
してをる。

岐阜縣梅林小學校では先般クレエヨン習字といふ新しい試みを始め一年生から三年生の學童に教授

は可成これを免れんとする傾向がある。而して現代の思潮に於ても自分等の都合のよい所ばかりを探り其の爲さねばならぬ

請負ふたフラー氏は日本を一人も使はない而も賃銀の二倍餘も高い本國から職工を呼び寄せてやらした。

さういふ事は、たゞ立派に成功してゐる。

岐阜縣梅林小學校では先般クレエヨン習字といふ新しい試みを始め一年生から三年生の學童に教授

は可成これを免れんとする傾向がある。而して現代の思潮に於ても自分等の都合のよい所ばかりを探り其の爲さねばならぬ

請負ふたフラー氏は日本を一人も使はない而も賃銀の二倍餘も高い本國から職工を呼び寄せてやらした。

さういふ事は、たゞ立派に成功してゐる。

岐阜縣梅林小學校では先般クレエヨン習字といふ新しい試みを始め一年生から三年生の學童に教授

は可成これを免れんとする傾向がある。而して現代の思潮に於ても自分等の都合のよい所ばかりを探り其の爲さねばならぬ

請負ふたフラー氏は日本を一人も使はない而も賃銀の二倍餘も高い本國から職工を呼び寄せてやらした。

吾々はトルストイの人格
なく修養なくして無制裁
なくが、それで立派に
成功してをる。

學校の經營が出来るであらうが、唯其の形式ばかりを真似したならば、由々敷問題を惹起すべきである。成城の或る參觀人は、生徒が窓から出入するのを見て、非常に感じたといふことである。これも同様である。我々は小原先生の抱負なく、自信なく、其の真隨りを了解することなくして、唯單に其の形式ばかりを真似たならば、兒童を毒すこと甚だしいものである。

吾々は児童の個性を重んじ児童の自治を重んずるは理想とするところである夫れ故に児童の本能に根ざし大人になれば自然消滅する行動で他人の妨害にならず道徳上有害でない限りは束縛を加へない。小供らしくのんびり育て、行きたいのである。

美しい企て
記念植樹

記念植樹

學校通信

各校のうるはしい 御大典記念事業

稗貫郡花城小學校では二
十六七日頃高等科を四組
にわけて珠算の競技会を

和賀郡成田小學校では御真影の奉安庫を建ました
稗貫郡矢澤小學校では御

學。校。通。信。募。集。

みな様方の學校の出来事や催し等に關する御通信を御願ひ致したいと思ひます、例へば學藝會をやつたとか、運動會をやつたとか遠足をしたとかどんな少い出來事でも御知らせくだされば誠に有難いことでござります、これは先生様方ばかりでなく生徒の方でもかまひません。

家の裏のへいぎはで
子守たちが遊んでた
黃色いむしろに坐つて
坊やをだましたまし
遊んでた
(豆の兄弟より)
子守たちは、子守たち

どうして、よく遊んでゐるのを見ますこの童謡にあらはれた子守たちの様子をよくみませう。子守達は、何をして遊んで居るでせう。坊やたちをわら様でも遊べるやうに、遊べて遊んでゐるかも知

れませんよ。なんだか子
守達の賑かな笑顔と、可
愛らしい坊やの顔とがび
つたり合つて、「ほら、
坊ちゃんこつち。」なんて
手を叩いてうれしがつて
る。

子守たちの優しい心が
思はれます。

心から微笑みつゝ讀ま
れる童謡です。

よく見る事ですが。人の
見えない所で、いゝえ見
てゐる所でも、あんぶさ
れるのもあきてかよく泣
く兒を、「泣かねえんだ、
泣かねえんだ。」とか言つ
て、頭で、背の兒の顔を打つ
亂暴な子守がありす
す。こんな子守を見る度
に、こんな子守を見る度

童謡に就いて(3)

子守たち

高橋芳夫

れませんよ。なんだか子
守達の賑かな笑顔と、可
愛らしい坊やの顔とがび
つたり合つて、「ほら、
坊ちゃんこつち。」なんて
手を叩いてうれしがつて
る。

子守たちの優しい心が
思はれます。

心から微笑みつゝ讀ま
れる童謡です。

よく見る事ですが。人の
見えない所で、いゝえ見
てゐる所でも、あんぶさ
れるのもあきてかよく泣
く兒を、「泣かねえんだ、
泣かねえんだ。」とか言つ
て、頭で、背の兒の顔を打つ
亂暴な子守がありす
す。こんな子守を見る度
に、こんな子守を見る度



兒
文
苑

演習

稗貫郡南城校三年

岩間三夫

あととひ演習があつたつた、僕と照男君と見に行

つた、グランドへ見に行つた。兵隊さんは、けん

つきてあちら、こちらをはせあるくあちらで野砲どんとなる、こちら

ぱちぱちぱち。

▲野あの大きな演習を、こんなに小さくまとめたのは、えらいことです。

白い雲や、黒い雲が走つて、何んだか氣味が悪い。こんな夜にあの川スギの聲を聞くと、小さい時のことが懐しくてたまらない。それは、今晚の様な氣味の悪い夜だつた。

僕は不意に小鳥にかけ出されたので、何んだかあらしきくなつてきたが初つた。しかし其の時はまだ五月の初め頃でもあつたし、又月も出て居るの

で魚捕りには少し早すぎた様だつたのでさう遠くへは行かないで、近所を見て歩くことにした。僕には初めてのことであつたし、又まだ小さい。一

種の不安と嬉しさをいたして兄さんについて行つた。カンテラの光をたよりに、先づ第一に水に入り易い所に行つた。そこは川岸の道から下りられて居る。其の日には恐しさがあり／＼と現れて居た

が懐しくてたまらない。▲評其の時の君の悲しさは、捕へた時の嬉しさの何倍でしたらうね。

尺位の柳が一かたまりになつて岸の方まで續いて居た。その小石の所に行つた時、不意に傍の柳の魚捕りはそつちのけにし

て、兄さんにせがんで、小鳥をしつかりと握り、おど／＼しながら家に歸つた。そして其の小鳥を

家の人見せると、川スギといふ鳥だと言ふ。又

綴方をもつて教室に来てカバンにその帳面を入れて居ると○○さんは怒りや」といつて、にらめ

た時の僕の悲しさは捕へた時の嬉しさの大きかつただけまた大きいものだつた。

○○さんをにらめながら

階段を下りて行つたが入口から庭を見ると皆がほこりだらけになつて掃除をしてゐたが、なんだか恥かしいやうな氣がして

庭へ出て行けなかつた、

だまつて入口の所でうろ／＼してゐたが、だんだ

んに時がたつてから皆が

教室にはいつて來た。私

春の夜の思出

和賀郡土澤校

菊池八郎

川の方で淋しさうに鳴いて居る鳥の聲が聞える。静かに耳をすまして聞くと、思ひ出深い川スギの聲だ。空を見ると月が朦朧とすんで、其の邊りを

▲野あの大きな演習を、こんなに小さくまとめたのは、えらいことです。

僕は初めてのことであつたし、又まだ小さい。一

種の不安と嬉しさをいたして兄さんについて行つた。カンテラの光をたよりに、先づ第一に水に入り易い所に行つた。そこは川岸の道から下りられて居る。其の日には恐しさがあり／＼と現れて居た

が懐しくてたまらない。▲評其の時の君の悲しさは、捕へた時の嬉しさの何倍でしたらうね。

あの川スギの聲を聞くと

教室にはいつて來た。私

も皆のあとについてはいつて行つた。

…… ◆ ……
のぞ私は、「ベン入さ一圓三十錢入れてらたつた今そめちゃんからとつたの

教室の窓から運動會に出る選手達が走るのを見て

二十錢なくなつてらたも物をかましたてたがぜに

つてるれば音するはづだと思つてカバンをさかさ

んたてだすんだ」といつた。「五十錢だの十錢だの

入れてららば二十錢なんてとらなえで、なんぼしだも」と言つた。それから買ふべど思つて來たつたつて五十錢とると思ふと言つた人もありまし

秋の雨

稗貫郡好地校

渡邊秀生

に同級會にかした五錢をかへした、私はそれをとつてから何分かたつて家

に歸らうと思つて廊下に出たが錢を落しては六日

の日に見に行かれないと

思つて筆入れをあけて入

るには私とえとちやんとせんちやんだけがゐた。三

しかはいつてゐなかつた私はびつくりして走つて

教室へ入つて来て「ぜにこ二十錢なぐなつた」と

いつて人の机の上にカバンをみんなあけて筆入れ

私は「二十錢ばかり取つたつて誰さもだまてれば

人で「…………かもしけなえ」と語り合つて

窓からまがつて「のぞいもあけて見たがなかつた

見て「二十錢どこさいれ

ただけだつた。皆は「先生だけだつた。皆は「先生

私は「二十錢ばかり取つたつて誰さもだまてれば

人で「…………かもしけなえ」と語り合つて

見て「二十錢どこさいれ

やせんだから」といつた

友達の一人が「あまえす

らべんとう買はねえば

見て「二十錢どこさいれ

やせんだから」といつた

友達の一人が「あまえす

らべんとう買はねえば

ふによかつたなと思つた

家に行つてぜにをなくし

あれの人あれのべんとうもつてあるいてるから、あれもつてあるくべんとあらえから買ふべつと思つて來たのだつたも。」と

た話をするとお母さんにのときえとちやんがさいふに十錢や一錢、五錢などをいれて「これあら

は出ないだ」とあきらめ

て家に歸つた。

▲ 許 おあしをなくしたかはり、此の佳作が生れたのでせう。どうです、其の後おあしがめつかりましたか。

た話をするとお母さんにのときえとちやんがさいふに十錢や一錢、五錢などをいれて「これあら

は出ないだ」とあきらめ

て家に歸つた。

た話をするとお母さんにのときえとちやんがさいふに十錢や一錢、五錢などをいれて「これあら

は出ないだ」とあきらめ

て家に歸つた。

きのことり

和賀郡輕井澤校六年

小原等子

一昨日の事であつた。先

生は『四時間目にこの時

間をあ話の時間にします

か、それとも近くの山に

きのことりに行きませ

う。』とおつしやつた。皆

は一せいに大聲をあげて

きのことりがよいとこた

へたのでそのことにきま

つた、休の時間にはもう

きのことりの話でもちき

つた。鐘が鳴つてやがて

先生の號令であるき出し

た。皆喜び勇んで出掛た

先生はとある山に連れて

行かれて『近所にゐるな

ら何處にゐてもよい、笛

がなつたら集ること』と

あつしやつて別れた。二

三人づゝかたまつて思ひ

／＼の方向に向つた。

あなたこなたと探し廻つ

て一つでもみつけたとき

のうれしさといつたらと

お母さんをしたつてねな

かつたさうです、そしてな

てもなかつた。

こうして一時間位もたつた頃遠くで笛の音がした

急いでかけつけた、

きのこはみんな先生にあ

げた。アミノメが一番多

かつた。

▲評 みんな先生におあげになつた。美しいお心がけですね。

アミノメが多かつたといふのはあなたの御謹送でせう。

死んだお母さんに入つてねた事が今でもかすかにあはえて居りますさうして二年ばかりたつてから

別なお母さんを迎へました。

僕は弟と二人で裏山に栗

拾ひに出かけました、次

に明るくなつて來ます

栗林についた頃はお日様

が東の山から出ました。

朝露がしつとり置いてる

所へ朝日はやはらかな

うと思ひます、今のお母

さんは三度目のお母さん

くさん持つた人はなから

うと思ひます、今のお母

さんは三度目のお母さん

です。

私はまだ五才の時でした

ふとしたかぜからお母さ

んは死んでしまひました

お母さんが病氣でねて居

る時私も病氣でねて居ま

したお母さんが死んだ時

私はおばあさんにだかれ

から(完)

▲評 大きく光るお星さんはそ

りや、あなたの死んだお母さん

かも知れませんね。

今 朝

和賀郡谷内校尋六

小原信一

私は今朝起きて見ると東の空はほんのりと白んで

朝は早く起るくせをつけた

いものですね

▲評 子供の時は、夜は早く寝て朝は早く起るくせをつけた

いものですね

天氣の日(童謡)

和賀郡土澤校尋六

平野定助

空が青いよ。

田の水が光る。

草も木も、

學校の屋根が、

さりと光るよ。

青田の中の

本道を、

馬が通る。

人も通る。

みんな白く。

光るよ。

▲評 クレイヨンを持つて、文

打つ音に目がさめた。母

は「一時だぞ」といつた。

夏休みの或る朝、時計の

朝草刈り

稗貫郡八幡校高二

似内龜五郎

かうして朝早く起きてい

い空氣の中で栗拾ひをす

るものが此頃の楽しみです

子供の力

れば、東の空はかすかに
白い。いざさらばと馬を
出し荷ぐらをさせた。次
に砥やいろ／＼の道具を
捕へ先づ飯を食べた。食
べをへてから草鞋をはき
馬に乘つた。門口を出て
見ると何處のうちでも寝
てゐる。唱歌をうたひな
がら勇み立つて行つた。
一番目の小川をこえた。
所が北風がすう／＼と顔
といはず手といはず吹い
て行く。間もなく野につ
いた。

馬からおり馬を向ふの太
い松の木につないだ。鎌
や砥をおろし、鎌をとぎ
にかゝた。

水をかけ／＼とぐ。鎌も
とげた。今度は刈方であ
る。先づ一把刈つた。「ど
うもきれない鎌だな」な
どと獨言をいひながら、
又鎌をといだ。とぎ終り
二把目を刈り始めた。さ
ん／＼／＼と刈つた。間
もなく二把刈つた。ふと

◆
▲ 許 真のやうに、勇敢に働く人
があるので、日本は世當強國の
一つになつて居るといふも
のだ。

見るとお日様も出る所だ
向ふの岡で刈る人もある
し、こちらの森で刈る人
もある、僕の様に平らな
所で刈る者もある。

刈る場所は一様でない。
間もなく四把刈つた。日
光に照らされながら露を
落しながら一生懸命に刈
つた。六把刈つた。刈り
終つて道具を捕へ馬をつ
れて來た。少し休んで
馬につけた。ずゐぶん重
かつた。つけ終り馬をひ
き出した。少し來ると隣
のおぢいさんが馬をひい
て來て「五郎さんお早よ
う」といつた。僕もいつ
た。うちに歸り馬からお
ろし馬を手入して馬屋に
と收めた。

◆
マナイデダンダンニワル
クナリマシタ。トシヲト
ミヨケチトケンカラシテ
トシヲガオカシヲカツテ
クルトミヨケチガキテオ
カシヲケロケロテオカア
サンニマイニチイヒマス
ミヨケチハネボスケダ。

◆
ハトヤサルナドタクサン
キマシタ。キノフノエン
ソクウレシイナ。
アカンボハアベワルクテ
ネテキマス。クリヲノ
稗貫郡花城校一年 澤田トシヲ
昨日のお休み 菊池忠介
稗貫郡花城校三年

◆
ハトヤサルナドタクサン
キマシタ。キノフノエン
小屋にいつてはいのりを
造りました。
するとだんだん日が高く
なりました。
そこで昨日ぢん取でけん
くわをした、たつちゃん
が來ました。そして『明
士さん白と赤の旗を持つ
と、魚屋の正さんと新吉
さんが來て『明士さん、
よつちやん』といひました
た。

◆
ハトヤサルナドタクサン
キマシタ。キノフノエン
小屋にいつてはいのりを
造りました。
するとだんだん日が高く
なりました。
そこで昨日ぢん取でけん
くわをした、たつちゃん
が來ました。そして『明
士さん白と赤の旗を持つ
と、魚屋の正さんと新吉
さんが來て『明士さん、
よつちやん』といひました
た。

◆
稗貫郡花城校一年 中野たまさ
稗貫郡花城校一年 中野たまさ
稗貫郡花城校一年 中野たまさ

◆
朝早くでしたからおうち
の屋根はまつ白く雪でも
ふつたやうになりました

◆
朝早くでしたからおうち
の屋根はまつ白く雪でも
ふつたやうになりました

◆
朝早くでしたからおうち
の屋根はまつ白く雪でも
ふつたやうになりました

◆
稗貫郡花城校一年 中野たまさ

◆
朝早くでしたからおうち
の屋根はまつ白く雪でも
ふつたやうになりました

◆
朝早くでしたからおうち
の屋根はまつ白く雪でも
ふつたやうになりました

◆
朝早くでしたからおうち
の屋根はまつ白く雪でも
ふつたやうになりました

◆
稗貫郡花城校一年 中野たまさ

◆
朝早くでしたからおうち
の屋根はまつ白く雪でも
ふつたやうになりました

◆
朝早くでしたからおうち
の屋根はまつ白く雪でも
ふつたやうになりました

◆
朝早くでしたからおうち
の屋根はまつ白く雪でも
ふつたやうになりました

◆
稗貫郡花城校一年 中野たまさ

◆
朝早くでしたからおうち
の屋根はまつ白く雪でも
ふつたやうになりました

◆
朝早くでしたからおうち
の屋根はまつ白く雪でも
ふつたやうになりました

◆
朝早くでしたからおうち
の屋根はまつ白く雪でも
ふつたやうになりました

◆
稗貫郡花城校一年 中野たまさ

◆
朝早くでしたからおうち
の屋根はまつ白く雪でも
ふつたやうになりました

◆
朝早くでしたからおうち
の屋根はまつ白く雪でも
ふつたやうになりました

◆
朝早くでしたからおうち
の屋根はまつ白く雪でも
ふつたやうになりました

◆
稗貫郡花城校一年 中野たまさ

◆
朝早くでしたからおうち
の屋根はまつ白く雪でも
ふつたやうになりました

◆
朝早くでしたからおうち
の屋根はまつ白く雪でも
ふつたやうになりました

◆
朝早くでしたからおうち
の屋根はまつ白く雪でも
ふつたやうになりました

◆
稗貫郡花城校一年 中野たまさ

◆
朝早くでしたからおうち
の屋根はまつ白く雪でも
ふつたやうになりました

◆
朝早くでしたからおうち
の屋根はまつ白く雪でも
ふつたやうになりました

◆
朝早くでしたからおうち
の屋根はまつ白く雪でも
ふつたやうになりました

◆
稗貫郡花城校一年 中野たまさ

◆
朝早くでしたからおうち
の屋根はまつ白く雪でも
ふつたやうになりました

◆
朝早くでしたからおうち
の屋根はまつ白く雪でも
ふつたやうになりました

◆
朝早くでしたからおうち
の屋根はまつ白く雪でも
ふつたやうになりました

◆
稗貫郡花城校一年 中野たまさ

◆
朝早くでしたからおうち
の屋根はまつ白く雪でも
ふつたやうになりました

◆
朝早くでしたからおうち
の屋根はまつ白く雪でも
ふつたやうになりました

◆
朝早くでしたからおうち
の屋根はまつ白く雪でも
ふつたやうになりました

◆
稗貫郡花城校一年 中野たまさ

◆
朝早くでしたからおうち
の屋根はまつ白く雪でも
ふつたやうになりました

◆
朝早くでしたからおうち
の屋根はまつ白く雪でも
ふつたやうになりました

◆
朝早くでしたからおうち
の屋根はまつ白く雪でも
ふつたやうになりました

◆
稗貫郡花城校一年 中野たまさ

◆
朝早くでしたからおうち
の屋根はまつ白く雪でも
ふつたやうになりました

◆
朝早くでしたからおうち
の屋根はまつ白く雪でも
ふつたやうになりました

◆
朝早くでしたからおうち
の屋根はまつ白く雪でも
ふつたやうになりました

◆
稗貫郡花城校一年 中野たまさ

◆
朝早くでしたからおうち
の屋根はまつ白く雪でも
ふつたやうになりました

◆
朝早くでしたからおうち
の屋根はまつ白く雪でも
ふつたやうになりました

◆
朝早くでしたからおうち
の屋根はまつ白く雪でも
ふつたやうになりました

◆
稗貫郡花城校一年 中野たまさ

◆
朝早くでしたからおうち
の屋根はまつ白く雪でも
ふつたやうになりました

◆
朝早くでしたからおうち
の屋根はまつ白く雪でも
ふつたやうになりました

◆
朝早くでしたからおうち
の屋根はまつ白く雪でも
ふつたやうになりました

◆
稗貫郡花城校一年 中野たまさ

◆
朝早くでしたからおうち
の屋根はまつ白く雪でも
ふつたやうになりました

◆
朝早くでしたからおうち
の屋根はまつ白く雪でも
ふつたやうになりました

◆
朝早くでしたからおうち
の屋根はまつ白く雪でも
ふつたやうになりました

◆
稗貫郡花城校一年 中野たまさ

◆
朝早くでしたからおうち
の屋根はまつ白く雪でも
ふつたやうになりました

◆
朝早くでしたからおうち
の屋根はまつ白く雪でも
ふつたやうになりました

◆
朝早くでしたからおうち
の屋根はまつ白く雪でも
ふつたやうになりました

◆
稗貫郡花城校一年 中野たまさ

◆
朝早くでしたからおうち
の屋根はまつ白く雪でも
ふつたやうになりました

◆
朝早くでしたからおうち
の屋根はまつ白く雪でも
ふつたやうになりました

◆
朝早くでしたからおうち
の屋根はまつ白く雪でも
ふつたやうになりました

◆
稗貫郡花城校一年 中野たまさ

◆
朝早くでしたからおうち
の屋根はまつ白く雪でも
ふつたやうになりました

◆
朝早くでしたからおうち
の屋根はまつ白く雪でも
ふつたやうになりました

◆
朝早くでしたからおうち
の屋根はまつ白く雪でも
ふつたやうになりました

◆
稗貫郡花城校一年 中野たまさ

◆
朝早くでしたからおうち
の屋根はまつ白く雪でも
ふつたやうになりました

◆
朝早くでしたからおうち
の屋根はまつ白く雪でも
ふつたやうになりました

◆
朝早くでしたからおうち
の屋根はまつ白く雪でも
ふつたやうになりました

てゐる。時々ばたばたと山鳩が飛んで行く時もある。所々でホーホケキヨーと鳴く鶯の聲が聞える。遠足も春はいゝ。せんまで出るだらう。節句もすんだ。梅や櫻も咲いてゐる、又春は一番勉強の出来る時である、仕事はずんずんすゝんで行く學校の窓から遠を見ると薄あをくかすんで見える。

山とちがつて又川も美しい、水はきもちよく流れてゐる、山も用もまけずに美くしい。

夕方 ◆

和賀郡土澤校尋六

菅 興 築 司

西に日がかたむきました

杉や松は赤くなり空は夕焼になりました。どこか

が流れて來ます。空には何千匹とも知れないトン

人の足が
たまつた露
木の葉にあたると
露が落ちるよ

雨の日(童謡)

稗貫郡矢澤校尋五

富 庄 次 郎

青葉のさきに

たまつた露

人の足が

びしや／＼するよ

木の葉にあたると
露が落ちるよ

ボがいつたり來たり飛んでゐます。子供等は竹を

かついではせまはつてゐます。その中には八つに

なる弟もまじつてゐます

西向の山々は赤くそまります。天地は皆赤くなりまし

もうながめてゐる中に日はとつぶり西の山にしづ

んでしまひました。群鳥はかあかあかなしさうに

鳴きながら飛んで行きます。

秋はさわさわとすゝきをなびかせてゐます。東の空はほんのりと明くなりました。お月さまのでるのも間近でせう。

◆

兒童作品

山寺鐘閣の夜

御大典奉祝

黄菊白菊

すつばね上げて
通る人

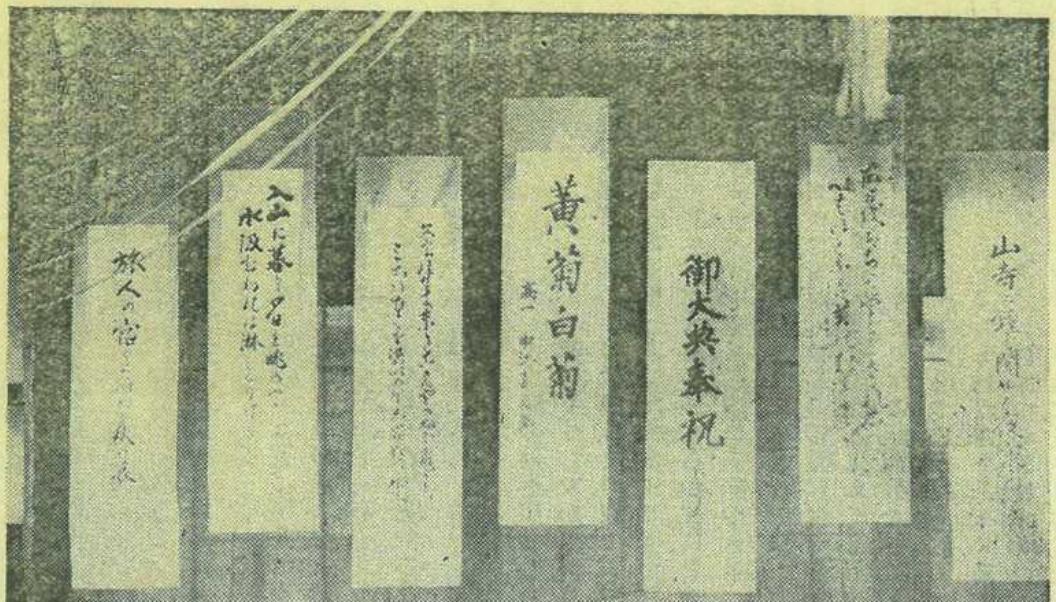
◆

農村の秋を報ずる文
稗貫郡矢澤校高二

佐藤誠一

何時の間にやら秋風身に
しむ頃と相成候。憂なき僕の心は毎日樂しく面白く暮し居り候。静かなる秋にても我が農村は非常に忙がはしくまして人手の少き僕の家等にては毎日『てんてこ舞』を致居る次第にて御座候。

仕事のむくれ勝なる我が村にても、もはや刈取もすみ、稻はせの三三五に散ばれる所或は道路にそふて城壁を巡らせるが如く立並ぶ様は田舎の代表的な好景にて候。又秋の山の美くしく彩られし木の葉や草をふみわけて紅葉狩や茸狩をするのも興味の深きものに候。かねて御存じの僕の家の柿の實も今年は鉛な



子供の力

りになり夕方などは陽に
映えて大そう美くしく、

ために色付きしかとさへ
思はれ候。

本月二十一日は日曜日に
候へば多くの友達と紅葉
狩するも一興あらんと存
じ候間御都合悪しからざ
れば御迷惑とは存じ候へ
ども小生あばら屋までち
出下され度御待ち申上候
草々

赤とんぼ(童謡)

稗貫郡南城校三年

すう／＼とんで行く
私が一びきとりたいな
こつちのささにとんでこ
い
きれいな尾をふりまして
ここささにとまつたら
私がおまへをとつてやら

小高い森に上つて里を見
おろせば自転車、自動車
馬車、荷を荷ふ人、皆手

を歌ひながら、あそこの
森、あそこの丘へとあそ
びまはつてゐる。

私の二つの人形
和賀郡川尻校三年
加藤和子

秋も酣になつて

和賀郡川尻校高二

山本鐵藏

にとる様に見える。まだ明るいうちに走つたつか終列車も今では日暮に近づつてこの豆

永遠にあれ

月
(童謡)

和賀郡輕井澤校六年

佐々木 清五
(一)
東の山から顔出した
丸い大きなお月さん
ほゝゑみながら
しづく上つて
空高く

(11)

銀のむ室で餅つきの

おうさぎさん

おどつてる

見てほいゑみながら
づか土つて空高

しつかに上つて
(三)

三三

お月様に上げぬと

正月
一月

ほゝゑみながら

しづかに上つて空高く

◆

私の二つの人形
和賀郡川尻波

利登精川廣林三公
加藤和子

私は二つのかはいい姉妹人形があります。姉の方は春子と言ひ、妹の方は花子と言ひます。私はこの二つの人形が一番すきです。まつくりなんふさくへしたかみをあかつばにして、お目々はばつちりとして、小さい口もとは、ほんとうにかはいらしくうござります、そしてねかすとしづかにおねこします。或日私がお人形を持つて遊んで居ますと、おとなりの小母さんがお出でになつて「まあかはいゝこと、だれにいたゞいたの」といひました。私はにつこりほゝゑんで「この春お姉様の東京おみやげよ」といふと小母さんは「まあさう、してお前は。」私は「春子と花子とつけたの。」といひますと「いゝお名前ですこと。」とほめて下さいました。私はこの人形を持つてあそぶのが何よりも

楽しみです。



ちぎれ雲

稗貫郡花城校高二

高 橋 瞳 子

淋しい心で

黙つて空を見てゐたら

白いちぎれ雲が

流れてもました。

の方の心の様に
あちらにとんでゆく
淡くも淋しい
ちぎれ雲。



兵隊さん

稗貫郡湯本校四年

小田島 きえ

私はへいたいさんを見る
とかはいさうでたまりま
せんあめのふる日でもな
んにもかぶらないである
いています私のうちに
いさんもへいたいにいつ
てきましたにいさんは
なしをきくと川にみづが
いつばいきてもうまをこ
がせるさうですへいたい

してくるしさうにむかふ
のほうへ行きました。



秋の山

和賀郡倉澤校六年
佐 藤 千 代



童謡

さんもなんぎですといつ
ていましたあととひは大
演習であめがふつてなん
ほうをうまにひかせたり

きなのにきかんじゆをか
ついであるいたり、たい
んに色づきました赤黄緑
が木の葉に色づきました
どの山をみてもどの山を
みても木の葉がさら／＼
おちるのが見えます。私

のうちのうらの山も木の
葉が赤くなりました。な
にの木だらう目がさめる
やうに赤ゝ色づきました
おもてにあるかきのはも
さら／＼あとがします。

◆
ある日

稗貫郡湯本校二年

山 口 政 雄

ぼくがあにはのさうぢを
してゐますと たはらを
つんだに車がさかにとま
つてあせをながしてゐ
ましたので、私はすぐと
んでいつて車をうしろか
らおしあげました。する
と、その人はたいへんよ
ろこんで、ぼくに十せん
のおあしをくださいまし
たから、ぼくの大すきな

山遊び
和賀郡立石校

阿 部 愛 子

この間もああさんと山遊びにゆきました、山の木の葉は赤くなつてゐました、私はしやせいどうぐを出して、すぐしやせいをはじめました、一番さきに遠くの山をかきました、二番目には、きれいな林を書きました。お母さんに見せたら『きっと甲よ』とおつしやいました、私はうれしくてたまりませんでした。またあるいてゆきますとお母さんが、はつだけを四つばかり見つけました。私も見つけようとおもつて、一しょうけんめいありますと。

あみのめを見つけました
かへりにくりをひろつて
かへりました。

秋の夕方

和賀郡輕井澤校高一

下坂はつ

口で笑つて、眼で泣いて別れたお友だち。

和賀郡黒尻校高二
玉澤よし

はひよつと眼をさました。すると私の向ふにね

一つ二つ輝いてゐた。

蒼くすんだあるお空

和やかになに廣い すく
だ心になりたい。とつく

づく考へてみる。

晚秋なのに、まだ何處
かご、コボコギバ鳥、て

がでる、『コロコロ』と

がのれせじ鳴いてゐた

鶴の聲は、もう聞えない
そして寂一ハ秋の夕方

はなんだか悲しい。

まう家に入らう。

ちらつとお友達の顔が
浮かんで来る、心の中で
『サヨウナラ!!!』さう考へ

裏の夏の夕暮

稗貫那花卷挾

小田島 さ

その雲まへなく
そはくした空氣

に包まれながら一日の日
は静かこそ暮れて行

音さへうすら淋しく、時
折りそれに交つてヒヨツ
＼と妙な鳥の聲が深み



編輯室から

△さびしかつた編輯室も、皆さんのお力ぞへてだん／＼にぎやかになつてきました。

△それは愛讀者から、どん／＼原稿を送つて下さるからです。

△殊に子供さんたちからは學校の手を経ずに、おきに本紙に送つて下さるやうになりました。

△よい原稿をたくさん送つて下さることは、本紙がのびてゆく最もよい養分でありますから、どん／＼と原稿を送つて下さい。

△本紙がのびると、それにつれて皆さんのがのびてゆくのです。

△皆さんはどこまでも、本紙を学校のほかいこのひま／＼に、すみからすみまでよつく讀んで下さい。

△めい／＼で讀むばかりでなくお互にこの文はどうだとか、あとの文はどうだとか、批評し合つて読むのも、おもしろくそしてためになること、思ひます。

△干鯛はよつくかまなければよい味が出ないし、又どんなによい肉でもまるのみにすれば養分にならぬと同じことで、本紙も

△本紙の作品に評のついたのは入賞のものです。

△第四號の懸賞募集を致しますから皆さん振つて寄稿して下さい。

△作品は絵方、童謡、短歌、俳句、書方、圖書。

△入賞者には賞品を贈呈します。

△締切は十一月廿九日。

△用紙はなんでもよろしいが字詰は十一字にして下さい。

△學校名、年級、氏名は是非記入して下さい。

△宛名は稗貫郡花巻川口町『子供の力社』

兒童作品懸賞募集

◆注 意 ◆

第四號の懸賞募集を致しますから皆さん振つて寄稿して下さい。

- △作品は絵方、童謡、短歌、俳句、書方、圖書。
- △入賞者には賞品を贈呈します。
- △締切は十一月廿九日。
- △用紙はなんでもよろしいが字詰は十一字にして下さい。
- △學校名、年級、氏名は是非記入して下さい。
- △宛名は稗貫郡花巻川口町『子供の力社』

子供の力

(毎週土曜日)
(月四回發行)

		半ヶ年	九 十 錢	一 月	一 册	四 錢	通 普 號	冊 定 價
				一 ヶ 月	十 六 錢			

昭和三年十一月廿二日印刷納本
(第三號)

行

●金の事は高代及前郵事は一切手代用
●外國手代用
●郵税は金十行

發行者 金澤秀次
編輯者 金澤秀次
印刷者 赤澤亦吉

岩手縣花巻川口町

印刷所 杜陵印刷所

岩手縣花巻川口町
發行所 子供の力社

